

ビキニ事件の被爆者¹として生きる

——大石又七さん・田中佳子さんに聴く

(聴き手 日本反核法律家協会事務局長 弁護士 大久保賢一)

当会は、本年4月マーシャル諸島共和国が核保有国9か国を相手どってICJに提訴したことを受け、その支援を表明する声明²を公表した。1954年3月1日、ビキニ環礁におけるアメリカによる水爆実験は、マーシャル諸島に甚大な被害をもたらすと同時に、当時近くで操業していた多くの日本漁船とその乗組員を被爆させた。その歴史的事実を踏まえ、当会機関誌『反核法律家』81号の特集「マーシャル諸島共和国による歴史的提訴」を編むにあたり、ビキニ事件当時、近くで操業中の第5福竜丸乗組員であった大石又七さんとそのご長女田中佳子さんにお話をうかがった。

なお、大石又七さんには、2012年4月に行われた第1回「原発と人権」全国研究・交流集会 in 福島において当会が主催した第5分科会「原水爆被爆者の運動に学ぶ」で報告者の一人としてご協力いただいている。

(日本反核法律家協会事務局)

マーシャル諸島とのかかわり

(大久保賢一) よろしくお願ひします。大石さんは、これまでマーシャル諸島にはどれくらい行っておられるのですか。

(大石又七) 3回行ってきます。

(田中佳子) 今年3月、ビキニ事件60周年の式典に招かれて出席しました³。そこで父がスピーチさせていただいたりして。

(大久保) マーシャルの式典というのは毎年行われるのですか。

(大石) 政府の主催でやっています。

(大久保) 日本とは大分違いますね。

(大石) 今回は、アメリカの国務次官補も出席しましたね。

(大久保) 大石さんが初めて訪問された頃と、今回とで何か変化を感じましたか。

(大石) 私が耳にした範囲でのことですが、マーシャルは島の数も多く、ビキニ周辺以外では高齢者はともかく、若い人はどちらかといえば無関心ですね。10年くらい前に私が訪問したときに話しをした住民や、被爆された人達の中には亡くなった方も多いです。事件を知らない人が増えているので、私はなるべく(記録を)活字として残すよう努力してい

¹ 原水爆実験被害については、放射能に曝されたという意味で通常「被曝」と表記されるが、大石又七さんは自身の著書『矛盾』(武蔵野書房、2011年9月)の中で、「核兵器による被害」という意味で自らを「被爆者」と表記されている。ここでは、それに倣った。

² 日本反核法律家協会「マーシャル諸島政府の核兵器保有国に対するICJ提訴を支持する声明」<http://www.hankaku-j.org/data/jalana/140723.html>

³ 田中佳子さんも大石さんに付き添いとして同行されている。

るんです。

(大久保) 政府主催の式典というのは、日本よりもずいぶん進んでいるように見えますが、それでも限界はありますか。

(大石) お金の問題があるんですね。核実験に関連して出すお金というのは、アメリカに要求しているんです。そういうところは(日本と)違いますね。マーシャルは、お金がないからアメリカに要求している。でも、なかなか出さない。

(大久保) ある意味では、核実験の被害をマーシャルは忘れていないぞ、アメリカはしっかり賠償せよと、それを示すために式典が行われているということですか。

(田中) そうですね。でも、アメリカとしてはもう除染も済ませたし、全部終わったことだからこれ以上お金は出さないという姿勢です。今、マーシャルはアメリカの庇護の下にあり、被害について言いたいことは山のようにあっても、声を大にして主張できないところがあります。そこへ、父のような日本から来た人間が、除染や補償の問題を問い、事件はまだ終わってはいないということを強く主張したことで、マーシャルの人達からはよくぞ私たちの気持ちを代弁してくれた、といわれ喜ばれました。事件後 60 年ということで、今回はマスコミも大きな関心を持ってくれて、日本のマスコミからだけでなく、様々な国から来たジャーナリストからも取材を受けました。そういう意味では、これまで以上に世界に向けて発信することができ、今マーシャルの抱えている問題を世界に知ってもらう良い機会になったので、すごく有難かったと、皆さんそう言ってくれました。

(大久保) 1996 年 ICJ の勧告的意見が出されるときに、マーシャル諸島の代表は“ロンゲラップ島で生まれた子どもを表現する言葉を私たちは持たない”という趣旨の陳述をしています。それは最初のお子さんを死産で亡くされた大石さん自身の思いにも重なることだろうし、今度の式典では、アメリカの庇護下にありながら、アメリカを含む核保有国を相手取って ICJ に提訴したマーシャル諸島政府とその住民を、大石さんが大いに励ましてきたということですね。

放射能汚染の隠ぺい

(大石) アメリカは、除染は済んだからロンゲラップ島に帰れというんだけど、島民は誰も帰らない。

(大久保) 実際のところ大丈夫なんですか。

(大石) それは大丈夫じゃないと思いますよ。大丈夫だ、大丈夫だと言っているけれど、過小評価しているからね。大丈夫だという科学者がいう言葉を信じているようでは…。まだ始まったばかりで、わからないんだから。政治的な意図が働いていると思いますね。

(田中) ロンゲラップ島では、いったん避難させられた後(島に)戻りますよね。戻った後、畸形を持った子供が生まれたり、がんになったりという状況で、島を棄てざるを得なくなりました。向こうでお会いした方たちは、自らもそうですし、身内ががんになったりと病気を抱えている方が多いです。今また、アメリカ政府は除染が済んだから帰るように

言うけれど、元には戻らない。マーシャルでは家族のつながりが非常に強いので、自分が帰ると家族全員が一緒についてきてしまう。だから、自分一人だったら戻るけれども、子どもを犠牲にできない、だから戻れない。

(大久保) 政府は戻れというけれど、戻れない、というのは福島状況とよく似ていますよね。

(田中) 今ロングラップ島には、除染作業をしているごくわずかな人しか住んでいません。島全体が除染されているわけではなく、限られた地域しか除染されていないので、戻れないんです。今は確かに福島などに比べても線量は低くなっているらしいですが、そういう場所に人を住ませたらどうなるか。直接的な被爆については、広島・長崎である程度データはありますが、(低線量被ばくについてのデータはないから) そういうところでデータをとりたいのかという疑いさえあります。

(大石) 私がアメリカに行ったとき⁴に、ネバダ核実験場の被害に遭った女性と会いました。一生懸命被爆のことを語っていました。でも、ずいぶん圧力をかけられたようです。しゃべるな、と。彼女の住むユタ州では共和党の力が強くて、長い間孤立して辛い思いをしていたようです。ネバダの周囲には未だ大勢の被爆者がいて、みなそれを隠している。でも彼女は勇気をもって発言している。まさかアメリカで、同じような経験してきた被爆者同士として本音を交わせるとは思っていませんでしたから、驚きました。どこの政治家も、政府も、放射能被害を隠そうとするんです。

平和ミュージアムに第5福竜丸を

(大久保) ビキニ事件を伝えるために、マーシャルで計画している平和ミュージアムに、大石さんがつくった第5福竜丸の模型船を寄贈するという話を聞いたのですが……。

(大石) それ(平和ミュージアム)が、なかなかできないんですよ。政権交代もあったりして。資材は全部そろっているんですけどね。

(田中) お国柄の問題もあるし、お金の問題もあって、一応外観としては、木材など取り寄せてつくったんだけど、中身はまだ全く整っていないんです。マーシャル諸島の政府としては、核実験被害を把握しているわけですが、一般の人たちの中では、世代の違いもあって、過去のことになっている。ビキニ事件があったことを知らない住民がとても多いので、まず現地の島民に知ってもらい、風化させないためにもミュージアムをつくりたいということが一つ。もう一つには、医療支援が遅れている国なのですが、日本はじめ各国のドクターが直接出向いて診察することは難しいので、そこにカメラなどの機材を置いて、インターネットを使ってそのカメラを通してドクターが問診しながら的確な指示が出せるようにしたい、という構想もあるらしいのですが、現状ではそこでストップしているようです。

⁴ 大石さんは、2010年NPT再検討会議の折、国際平和分科会等でビキニ被爆者として発言するためにニューヨークに赴いた。

ビキニ被爆者として生きるということ

(大久保) 話は変わりますが、第5福竜丸の乗組員23名でしたか、今も生存している方は何名おられますか。

(大石) 9人ですね。

(大久保) その方たちと今、交流はありますか。

(大石) (事件の後) そんなに交流はありませんね。乗組員の間でも、次第に立場が離れてしまいました。漁労長だった見崎さんが、半世紀経ってから我々の症状は被爆とは関係がないと仰いで、その後一貫してそう言い続けている。また表に出てしゃべりたくないという気持ちの人もある。でも、私は当事者で、事実を見ているんですよ。何人もがつらい思いで亡くなっている。家族もそうです。このままではあまりにも可哀想だ。そういうことを考えたら、本当のことを言うしかない。だから、私は自分の思うままに発言してきました。

(大久保) 同じ体験をしながら、敵対することになるのはつらいことだろうし、また一方で大石さんの言動が共産党の回し者だとして押さえつけられようとするわけですね。それに対して、大石さんはどんなふう乗り越えてこられたのですか。

(大石) 事実を語るしかないんですよ。変な言い訳をしない方がいいと思うんですね。

(大久保) 被爆者だと知られること自体が世間からの差別を招くから、黙ってしまう人も多いと思うんです。大石さん自身も一度は焼津から東京へ、いわば身を隠すような格好でやってこられた。それが、自ら事実を語らなければならないと思うようになったその一番大きなきっかけは何でしたか。

(大石) うーん、私は単純だからね。単純な考えなんです。仲間がばたばたと死んでいっているわけです。こんなバカなことはない。政府のやっていることへの反発、私はこうして生きているけれど、こんなことが許せるかという悔しさですね。

(大久保) ビキニ被爆者の場合、広島長崎の原爆被爆者のような医療手当等の保障もなく、いわば法の保護の外におかれているところがありますね。ビキニ核実験当時、あの海域では第5福竜丸以外にも多数の漁船が操業していたはずですが、その乗組員たちが声を挙げなければ、このまま忘れられた被害者として歴史の中に埋もれてしまう怖れがある。

(田中) 同じビキニ被爆でも、第5福竜丸と他の漁船とはまた立場が異なると思うんです。第5福竜丸の場合は、補償金として一人当たり200万円が出たんですが、それが支払われたことでこの問題は日米の間で政治決着してしまいます。そして、他の船に乗っていた人は、声を挙げてもお金はもらえないし、逆に被爆したことが世間に知られると、もう船に乗れなくなり、生計の途が立たれてしまうので、自ら口を閉ざしてしまいました。そして、がんなどの病気を発症して亡くなっていきました。一方でお金が払われた第5福竜丸乗組員は、当時大きな打撃を受けた水産業者に妬まれただけではなく、「借金を肩代わりしてくれ」とか、「戦争未亡人など苦勞している人のためにお金は寄付するべきだ。」といった声もあり、社会から身を隠したい、そんな背景があったと思うんです。

思いを受け継ぐ

(田中) (父が語るようになった) きっかけといえば、やはり和光中学で生徒さんにお話をしたことが大きかったように思います。大人と違って利害関係のない子どもたち、これからは担う子どもたちに伝えなければいけないという気持ちが強くなって、どんどん話をしていこうと思うようになったのではないかと思います。第5福竜丸の模型船をつくるようになったのも、実は和光中学での講演がきっかけだったんです。目の見えない生徒さんがいて、言葉で説明してわからなくても、手で触れることができるものがあれば、船というものが理解しやすいのではないかと1隻目をつくって、それは和光中学に置かれています。そこから船作りが始まって、いろいろなところに置かせていただくようになったんです。……なかなか頑固なので。やり始めたら最後まで続けるというところはありますよね。

(大久保) そうだったんだ。

(田中) 今年のマーシャルの式典だって、本当は主治医からは大反対されたんです。3月の寒い日本から暑いところに行くことになるので、脳梗塞をやっている、高血圧もありましたから、飛行機では気圧も変わるしというので、ドクターはすごく心配して。俺がこれだけ止めているのに、行くんだったら何かあっても旅行保険はおりないよって。でも本人は、自分はビキニ被爆で死んでいるし、肝臓がんを患ったときに死んでいるし、脳梗塞をやって、もう3回死んでいる、もうとっくに死んでいてもおかしくないから、マーシャルで死んでもいいって。

(大久保) 怖いものないんだ(笑)。

(田中) 怖いものなしですよ(笑)。マーシャルで埋葬してくれればいい、っていうくらい強気の勢いで。

(大石) 自分は恵まれていると感じますよ。大変なことはあったけれど、毎日いい方向に向かってきたと思います。当時の乗組員の半分以上の人が亡くなっている中で、私は生き残っている。知識があるわけではないし、そんなに立派な人間ではないが、自分は幸せだと思います。活動しているときは夢中で、変な言い方ですが神がかりになったような状態で。

(大久保) 佳子さんは、お父さんの姿を見ていて、これからそれをどのように承継していくか、そんなことを考えたことはないですか。

(田中) 引継ですか? いや、考えたことないな(笑)。

(大久保) 大石さんの本『矛盾』⁵に寄せられたリチャード・フォーク氏—私も尊敬する学者ですが—の序文で彼はこんなことを言っています。「大石さんの人生はつまるところ、人間の魂の不屈さの証である。水爆実験の非情な影響に日々向き合わねばならなくなった青年期の、想像を絶する不幸にかかわらず、彼は、核兵器と戦争の神への服従から人間性をとりもどすためにやれることを何でもやる」

(田中) そう言っていたかと、さも素晴らしい人間のように聞こえますけど…(笑)。

⁵ 註1 参照

(大久保) 近くにいると、素晴らしいものが見えないんだよ (笑)。

(田中) その本の英語版は、今回のマーシャル行でもあちこち配ってきたんですが、向こうの上院議員の方は既に持っていらして、かなり詳しくいろいろなことをご存知でしたね。

(大久保) やはり承継しているじゃないですか。

(田中) どうなんでしょうね (笑)。

(大久保) 我々も、大石さんから受け継ぐべきことはしっかりと受け継いでいきたいと思っています。今日も長時間にわたってお話を聴かせていただき、有難うございました。これからも、どうぞよろしく願いいたします。